

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	松 田 康 平
論文審査担当者 主 査 外 科 学 朝 倉 啓 介 先端医科学（脳科学） 田 中 謙 二 形成外科学 貴 志 和 生 精神神経科学 内 田 裕 之 学力確認担当者：金井 隆典 審査委員長：田中 謙二 試問日：2024年12月17日				
(論 文 審 査 の 要 旨)				
論文題名：Quality of life, psychological states, and personality traits in patients with pectus excavatum (漏斗胸患者のQOL、精神状態、性格傾向に関する研究)				
漏斗胸患者の多くが自身の外観に悩み、それがQuality of Life (QOL) の低下につながるとの報告があるが、社会心理面を包括的に検討した報告は少ない。本研究では、漏斗胸術前患者におけるQOL、精神状態、性格傾向を包括的に評価することを目的とした。結果として、社会的QOLの低下、社交不安の増加、自己効力感の低下、外向性の低下を認めた。 審査では、年齢、手術方法についてまず問われた。比較的若年の集団が対象で、全例が手術介入され、チタン製のバーを用いるNuss法が9割程度で行われたと回答された。高齢の場合は術後疼痛が強い場合があり、術後評価ではその点も考慮すべきと助言された。次に漏斗胸が遺伝的因子により発生する可能性があるが、その遺伝的因子が精神状態に影響するか問われた。本研究では遺伝的因子は検討できていないので、今後の課題としたいと回答された。続いて今回の研究開始段階での仮説と評価項目の関係について問われた。対話を苦手とする患者が多く、性格傾向の偏重があるのではないかと仮説を立てたが、性格のみでは狭い研究となるため、主要評価項目をQOLとし、それを補完する精神状態と性格傾向も調査したと回答された。次にHaller index (HI) が正規分布をとっていたか、重症度分類はあるか問われた。HIは正規確率プロットで正規性を確認しており、重症度分類について定義はないが手術適応となるカットオフ値が存在すると回答された。HIを連続変数として解析するのではなく、重症度により層別化すると違う見解が得られるのではないかと助言された。続いて漏斗胸の手術適応を身体的指標のみで決定すべきではないとあるが、具体的にどうすべきか問われた。重症度と社会心理学的指標に相関関係がないため、陥凹が軽度でも社会心理学的指標の低下を認める可能性があり、身体的指標で治療適応とされない症例でも介入を検討すべきだと回答された。それに対し、縦断研究が行われておらず、この点は今後の研究の課題とすべきだと助言された。研究限界として自己記入式アンケートのみを用いたこと、一般化集団との比較に留まったことについての考察を問われた。自己記入式アンケートの利点として比較的簡便な方法であることが挙げられるが、欠点として他者記入式アンケートと比較して回答バイアスが生じやすいと回答された。また、年齢や性別、社会背景などを一致させたコントロール群と比較すべきだったと考えるが、今回はそれができておらず、同じコホートを縦断的に評価することが必要であると回答された。 以上、本研究にはさらに検討すべき課題は残るものの、漏斗胸患者のQOL、精神状態、性格傾向を包括的に検討した点で有意義な研究であり、現在進行中の縦断研究によってさらなる進展が期待できると評価された。				